

ベストピア Bestopia

「パリ通信 32号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十六年八月
第二十二号

< 2014年 8月 >

古賀 順子

「ラスコー2」

8月に入り、パリは観光客が集まる場所以外、人も車もまばらです。例年になく雨が多く、昼間でも22-23度の日が珍しくありません。20度を下回る涼しい朝晩です。

9日・10日の週末を利用して、日本の中高校生と一緒に、ラスコー洞窟の壁画を見に行きました。14-15歳の男の子の興味は、自然史や歴史。この点は万国共通のようです。パリ5区の自然史博物館も見て、自然や人間の進化に触れる夏休みです。

ラスコー洞窟があるのは、モンテイニャックという小さな村です。フランス南西部ペリゴール地方(ドルドーニュ県)で、パリから520kmの距離。列車と車乗り継いで5時間かかります。私たちは、陶器で有名なリモージュまで列車、そこからレンタカーで移動しました。

ラスコー洞窟は、1940年に発見されます。モンテイニャック村の4人の男の子が入口を見つけ、1万7千年の眠りから覚めることになりました。44年第二次世界大戦が終了すると、多くの人々が見物に洞窟内に入ります。人間の体温、吐く息であつという間に壁画に黴が発生、劣化が著しく、1963年一般公開は禁止されます。当時の文化大臣アンドレ・マルローの監督下、オリジナルの洞窟から200m離れた場所に原寸大のレプリカ「ラスコー2」が作られ、1983年夏から現在の一般公開が行われ、年間25万人を超える観光客を集めています。

クロマニオン人たちが描いたラスコー洞窟の壁画は、それが1万7千年前のものであるとはとても信じられません。馬、雄牛、鹿など、80%は動物の絵です。部族の印だと推定される不思議な模様、人の手形などもあります。洞窟内は暗く、動物に襲われる危険性もあり、香を焚いた跡があることから、壁画は宗教的な儀式として描かれたと見做されています。松明の光だけで描いた壁画ですが、動物たちのリアルな線、バランス、着色など、絵画技術の高度さに驚かされます。壁画が均一でないところでは、筒に顔料を入れて吹き付け、粘土質の壁面には、指で色を押し付けています。

岩の凹凸を利用して、動物の体の膨らみを表現したり、彫刻のように岩を削ったところに絵を重ねている方法もあります。奥に見える鹿の角が、手前の角より短く描かれ、遠近法も知っています。連続して描かれた5頭の馬の姿は、まるで走っているようです。動きと時間の感覚を有していたことが分かります。

ラスコーの壁画を見ていると、そもそも人類の進化とは何かという、素朴な疑問が湧いてきます。紀元前300万年にアフリカで人類の祖先が現れ、90万年前にヨーロッパに人類がいたと考えられています。火を使うのが40万年前。道具を使い、考え、感情を持って行動する新人ホモ・サピエンスが現れるのは、20万年前。19世紀、ラスコー洞窟から35kmの距離にあるエイジー・ド・タイヤックで化石として5体発見されたのが、旧石器時代に属する新人クロマニオン人です。人類の進化の時間は、気が遠くなりそうです。さらに、自然の進化は、その比ではありません。

ラスコー洞窟壁画を見て、エイジー・ド・タイヤックに近いル・ビュグに泊まり、10日朝プルメイサック鍾乳穴を見学しました。17・18世紀から地元の人たちには知られていた鍾乳穴です。サルラからペルグーへの街道沿いに位置し、ゴミを捨てたり、家畜の死体を投げ込んだりしていました。洞窟は別世界、特に死の世界への入り口とされ、敢えて入る人はいませんでした。1907年、洞窟学者が入り、堆積していたゴミを取り除き、初めて美しい鍾乳洞の存在が明らかになりました。深さ42m、60x30mの楕円形、何十億年もかけて、自然が作り上げた鍾乳洞。200年に1cmしか結晶しない鍾乳石。自然の進化は、桁違いに長いことを実感します。

人間は自然を必要とするが、自然は人間を必要とはしない。人間が真摯にそのことを理解すれば、自然を破壊するような行為はできない筈だ、と解説していた物理学者の言葉を思い出しました。

1泊2日で往復1200kmの旅は、さすがに大変でした。夏休みの大渋滞、列車の遅れも重なり、パリに辿り着いたのは夜10時過ぎ。疲れましたが、パリに入る列車の窓から、一際大きく美しく輝く満月を見ました。10日夜の満月は「超月(スーパー・ムーン)」。月が太陽に一番近い時の満月で、本当に大きくて綺麗でした。